

目次

卷頭言……………一

日本漢音における軽声の消滅について——漢籍を資料として……………佐々木 勇……………五

「山科家礼記」における助数詞について……………三保 忠夫……………三〇

鎌倉時代の申状に見られる裁許要請文言の類型について……………西村 浩子……………六〇

「民烟」小考……………栞 竹民……………八四

中世における動詞句の成立に関する一考察——「メニアフ」の成立について——

……………青木 毅……………一〇八

藤原俊成自筆『古来風躰抄』における異字体をもつ仮名について……………豊田 尚子……………一三六

——「記述部分」特有の仮名字体を中心として——

平安時代後半期和化漢文資料の疑問詞疑問文における助字の用法……………磯貝 淳一……………一六六

高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴經 加点字翻刻並びに分韻表……………榎木 久薫……………一八三

唐招提寺蔵片仮名文説話三種 影印・翻刻並に解説……………山本 秀人……………二七一

——「取鷹俗母縁」「役行者悲母事」「桃華因縁」——……………宇都宮啓吾

「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」二種(漢字仮名交り文・和化漢文対照本文)

「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」漢字索引……………田中 雅和……………三〇五

田中 雅和……………三七一

日本漢音における軽声の消滅について

——漢籍を資料として——

佐々木 勇

目次

- 一、本稿の目的
- 二、軽声点が無くなる時期
 - 1. 漢籍訓点資料
 - 2. 漢籍字音直読資料——「蒙求」——
- 三、調値変化と変化の理由
 - 1. 入声軽の場合
 - 2. 平声軽の場合
- 四、軽声の消滅理由
 - 1. 漢音声調の特殊性
 - 2. 漢字の声調を維持できた理由
 - 3. 軽声の消滅理由
- 五、軽声消滅後の四声体系と「廣韻」声調・清濁との対応関係
- 六、軽声点の消滅が意味するもの

日本漢音における軽声の消滅について

「山科家礼記」における助数詞について

三保忠夫

目次

- はじめに
一 用例調査
二 注意される助数詞
三 実隆公記との比較
四 用法の分類
おわりに

一 はじめに

山科家礼記(書陵部蔵本)は、十五世紀、中流公家山科家の雑掌らの手になる、山科家の動静、家職、財政、所領経営等についての記録である。記者は、筆跡から見ても、(イ)末詳Ⅱ「応永十九年の部分」、(ロ)大沢久守「永享二年へ一四三〇」—明応七年へ二四九八Ⅱ「(イ)(ハ)以外の部分」、(ハ)重胤Ⅱ「応仁二、文明二、三年(別本)の部分」の三人であると考えられる。古来、公家(公卿)・僧侶・神官等による記録は多いもの、こうした家司による記録は珍しく、その当

主の手になる教言卿記や言国卿記、言継卿記、言経卿記と共に、中世権門体制の崩れていく室町時代の動静・実態をつぶさに伝える資料として重視されている。

山科家礼記は、助数詞研究資料としても有益である。「山科家は宮中御厨子所で調理される食物を献上する供御人たちを支配していたから魚介類のことは日記中によく出てくるし、所領のある山科からはやまも、栗をはじめとして各種の果物、野菜が来たから、当時の京都の食糧事情がよくわかる。宇治の市で販売される魚介類の種類も実に豊富で、時代が下るにつれ海産物がふえてくる。」⁽¹⁾とされ、こうした状況に伴って多くの助数詞が見えるからである。助数詞研究上、山科家礼記(以下、「本資料」という)には、次のような特徴が認められる。

- ① 日常的、現実的な生活の支えとなる物資に関する助数詞が多い。これらは、日常卑近なものであるために、却って、文字(言語)資料、また、公的記録類に記載されることが少なく、後世に伝えられることも少ない。
- ② 物資は、果物、野菜、魚介類といった食料や衣類などの多岐にわたる。それらの加工品類も見えており、物資の別名、俗名、通称の類も用いられている。当時の人々の生活の中における助数詞の細やかな使用方法が知られる。
- ③ 仮名書きの用例が多く、助数詞の、実際に口頭で話されていた形態(実情)がわかる。

総じて、他の資料(文献)によっては知り得ない助数詞の用例が得られ、また、その用法(その対象も含めて)が豊富に求められるところに、本資料の価値が認められるのである。

以下に、本資料における助数詞について検討する。依拠するテキストは、『史料纂集』(第一期)所収の「山科家礼記」第一―第五(昭和四十二年十二月―同四十八年十月刊行、続群書類従完成会、校訂、豊田武・飯倉晴武)である。

一 用例調査

本資料における助数詞をリストアップすれば、別表のようになる。但し、ここには、年月日に関するものを省いた。

「山科家礼記」における助数詞について